

学習指導要領を中心とした高校数学教育の変遷

高校進学率

1955年には高校への進学率は51%であったが、その後10年余でおよそ90%に伸び、過去20年は95%前後である。その間、後期中等教育は戦前のエリート教育から万人の教育へ、学力や進路の多様性に準じた教育、社会の変化に応じた教育が求められることになった。結果として、数学の必修授業時数(単位数)は大幅に減少した:1968年には全生徒必修6時間、1978年には全生徒必修4時間、2003年には、全生徒必修3時間となり、大学進学者の到達水準を維持する必要から選択化が進展した。

1989年の改定では、コア科目とオプション科目を次のように設けた。

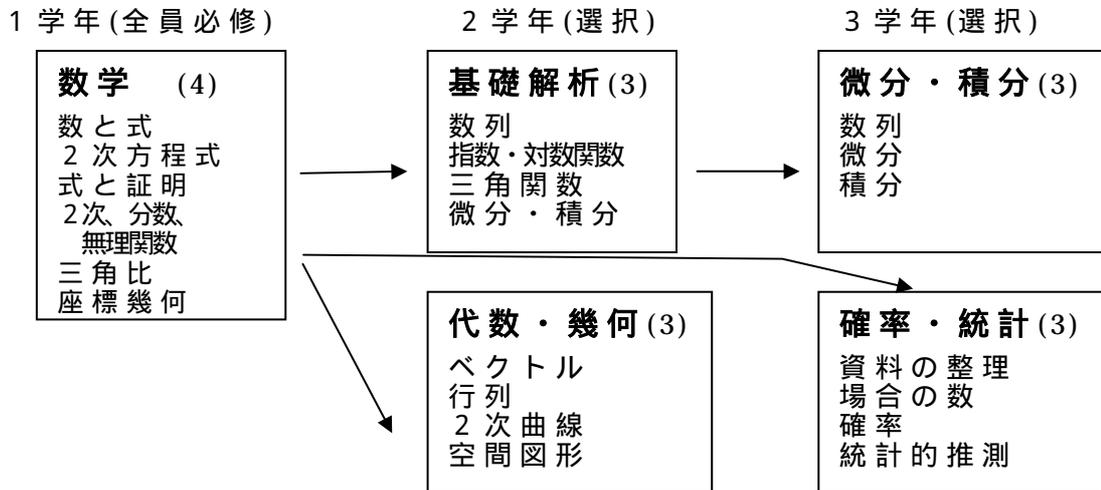
- ・コア科目: 数学Ⅰ、Ⅱ (関数、微分・積分中心)
- ・オプション科目; 数学A, B, C (図形、確率・統計中心)

2003年実施の教育課程では、「数学基礎」を新しく設け、統計などの日常的な事象や生徒が興味・関心をもつ教材を盛り込み、苦手な生徒でも必修単位数2時間を取得できるようになった。ただし、「数学基礎」を扱う高校は4%にとどまっており、たとえ数学が苦手な生徒にも、得意な生徒、できる生徒と同じ内容を履修させようとする学校は多い。

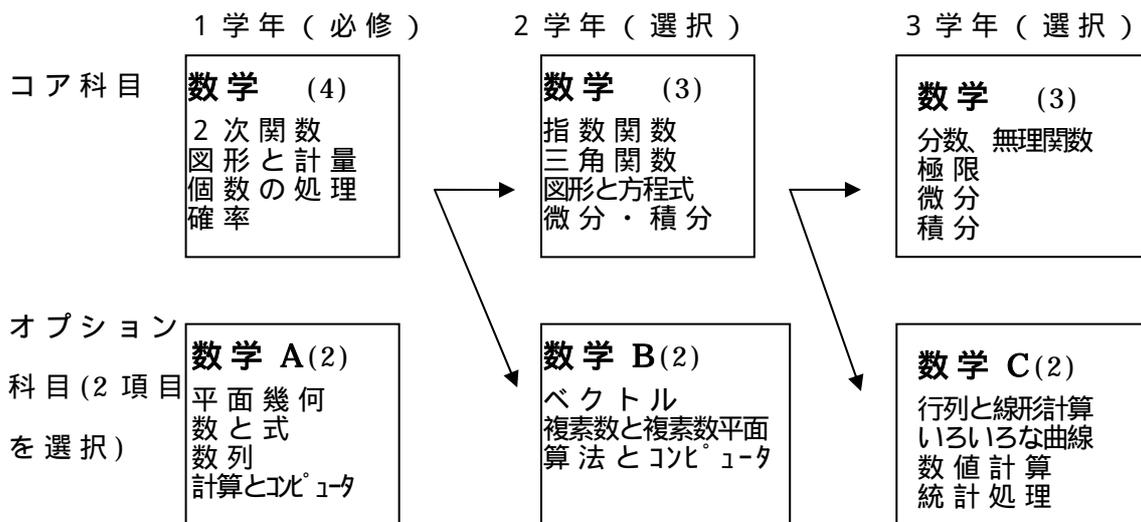
学校の教育課程は、日本では学校毎に定められるが、現実には、検定を経た教科書を主たる教材として用いることから、多様性に応じきれなかった。少子化による高校数減少、廃校化、学校統合の流れの中で、学校毎に意味のある教育課程を編成し、生徒を確保しようとする動きが増大している。そこでは、高校数学が役に立ち、面白いものだと高校生が感じる教育課程の提案もなされている。

学習指導要領と研究主題の変遷

・ 1978年の学習指導要領の主要部分 ()は1週間の授業時間数



・ 1989年の学習指導要領の主要部分 ()は1週間の授業時間数



・ 2000年の学習指導要領の主要部分 ()は1週間の授業時間数

